～別院だより～

モダン寺新聞

第27号　発行所

浄土真宗本願寺派　本願寺神戸別院

〒650-0011　神戸市中央区下山手通八丁目1番1号

TEL 078-341-5949

教章制定についての親教

宗祖親鸞聖人の御誕生八百年・立教開宗七百五十年を控えた一九六七（昭和四十二）年四月、当時の宗門を憂えられた大谷光照門主が「浄土真宗の教章」を定められ、親鸞聖人の流れをくむものとして、心に銘ずべき肝要を示されました。以来四十年余り、そのご教示は、浄土真宗門徒の信仰生活の規範となってきました。

一方、宗門は一九四六（昭和二十一）年に制定された「宗制」を根本にして活動してきましたが、このたび「宗制」が改正され、時代を超えた不変のことがらと時代に即応すべきことがらが整えられました。それにともなって、新しい教章を制定いたします。

浄土真宗の教章（私の歩む道）

宗名　浄土真宗

宗祖（ご開山）　親鸞聖人
ご誕生　二七三年五月二十一日（承安三年四月一日）
ご往生　一二六三年一月十六日（弘長二年十一月二十八日）

宗派　浄土真宗本願寺派

本山　龍谷山　本願寺（西本願寺）

本尊　阿弥陀如来（南無阿弥陀仏）

聖典
・釈迦如来が説かれた「浄土三部経」
『仏説無量寿経』
『仏説観無量寿経』
『仏説阿弥陀経』
・宗祖　親鸞聖人が著述された主な聖教
『正信念仏偈』
（『教行信証』行巻末の偈文）
『浄土和讃』『高僧和讃』
『正像末和讃』
・中興の祖　蓮如上人のお手紙
『御文章』

教義　阿弥陀如来の本願力によって信心をめぐまれ、念仏を申す人生を歩み、この世の縁が尽きるとき浄土に生まれて仏となり、迷いの世に還って人々を教化する。

生活　親鸞聖人の教えにみちびかれて、阿弥陀如来のみ心を聞き、念仏を称えつつ、つねにわが身をふりかえり、慚愧と歓喜のうちに、現世祈祷などにたよることなく、御恩報謝の生活を送る。

宗門　この宗門は、親鸞聖人の教えを仰ぎ、念仏を申す人々の集う同朋教団であり、人々に阿弥陀如来の智慧と慈悲を伝える教団である。それによって、自他ともに心豊かに生きることのできる社会の実現に貢献する。

この「教章」は、わが宗門に集う方々に、ぜひ心得ていただきたい浄土真宗の要旨であるとともに、新たにご縁のできた方に、み教えを理解していただくための手引きでもあります。

私たちは、近く宗祖親鸞聖人の七百五十回大遠忌をお迎えいたしますが、この大遠忌を機縁に、先人の方々が身をもって伝えてくださった親鸞聖人のおこころを深く受けとめ、浄土真宗のみ教えを混迷の時代を導く灯火として高く掲げ、人々に広く伝えながら、ともに世の安穏をめざして歩みたいと思います。この「教章」を身近に備え、折りにふれて参照し、浄土真宗に親しんでくださるよう期待いたします。

二〇〇八（平成二十）年四月十五日

門主　大谷光真

永代経法要 勤修される

去る六月十五日(日)、十六日(月)の二日間に渡り、本願寺神戸別院に於いて、平成二〇年度永代経法要が勤められました。

「永代経法要」とは、浄土真宗のみ教えを聞き慶ぶと共に、み教えを伝える中心となるお寺が末永く(永代に)存続し、子や孫にわたってお念仏を受け伝え、ご法義の相続が途切れることなく続くように、との願いをもって勤められる法要です。

法要に先立って、本堂左余間の七高僧御影が、右余間の聖徳太子御影の隣へと移され、左余間に故人の法名を記載した法名軸が奉献されました。

法要当日は、蒸し暑い梅雨の最中にもかかわらず、多数の参拝をいただきました。法要は午後一時半より、松村彰道輪番導師のもと十五日は観無量寿経作法、十六日は無量寿経作法のお勤めが、厳かに勤修されました。

法要両日とも、本願寺派布教使・山口教区都濃西組善宗寺・香川孝志先生より御法話を頂きました。

御法話の中で香川先生は「永代経法要とは、永代読経法要を略したもの。先輩がお経を読むのを止めずに相続して下さらなければ、伝えて下さらなければ、我々は今お経を読むことはできなかった。私のところまで、先輩方が伝えて下さったお陰で、今私がお経を読むことができるのであります」と、み教えの相続について述べられました。

そして、「私が間違いなくそのお経(教え)をいただくというのが永代経法要の一つの意義であります。と同時に、子や孫、ひ孫に、この神戸別院がある限り、この尊いお念仏の教え、正依の経典(浄土三部経)を読み続けていこうということが、永代読経法要のもう一つの意義。それをもってお寺で総法要を行うのがこの度の永代経法要のご縁であります。」と、法要の意義についてお話をいただきました。

お寺があり、法要・法座が勤まり、そこに集うお同行がおられる限り、永代に法が伝えられていくのであります。

読経中にお焼香をされる参拝者

子ども会から

『み仏と、みなさまのおかげにより、このごちそうをめぐまれました。深くご恩を喜びありがたくいただきます』

『尊いお恵みにより、おいしくいただきました。おかげで、ごちそうさまでした』

これは浄土真宗の食前・食後の言葉ですが、馴染みでない方も多いかとは思います。モダン寺土曜子ども会では食事をする時には必ず全員で手を合わせ言っています。

近年『いただきます』『ごちそうさま』と言う習慣が薄れております。

食事や食材にお金さえ払えば感謝の意を表す必要はないのでしょうか。そもそも一体何に感謝しているのでしょうか。

ある日、子ども会でこのような話をしました。

「みんなご飯食べる前、合掌していただきます!って言うよね。何に対して言ってるのかな?」

「お父さん!」「お母さん!」「農家の人!」

「そうだね、みんないないとご飯食べられないもんね、他には?」

「うーん、お店の人!」

「確かに!お店の人にも感謝しないといけないね。でも、一番に感謝しなきゃいけないものがあってね、みんなが、毎日食べてるものは野菜だってお肉だって、みんな呼吸していて命があったんだよ、ということは、みんなは命をいただいているんだよ。だからその尊い命に対していただきますって手を合わせるんですね。」

命の恩恵を受け、生かされている身であることを、子どもたちと共に考えた一日でした。気付かされた私は尊い命に手を合わせ、心の中でこう言います。「沢山のいのちをありがとうございます。尊いいのちをいただきます」と。

モダン寺もの知り手帳

本願寺神戸別院は、日本の仏教寺院ではあまり目にすることの無い独特な外観をしています。インド仏教様式というその斬新な建築デザインは、昭和五年の建立時より、地元神戸の人々から『モダン寺』の愛称で親しまれ、今に至っています。

そんな神戸別院ですが、外観はよく見るが、実際に中に入って本堂がどうなっているのか、内陣（ご本尊を安置している部分）はどんな造りになっているのかじっくりと見た事はない、という方も多いかと思います。

実は、神戸別院は外観だけでなく本堂のお荘厳（しょうごん・お飾り）も、『モダン寺』の名前に相応しい、随分と珍しいものとなっているのです。そこで、今号より神戸別院のお荘厳について特徴的なものを紹介していくことにします。

3階本堂のご本尊と戸帳

戸帳（とちょう）

戸帳とは本尊の安置されている宮殿（くうでん）等に吊り、尊像の正面や側面を覆う戸張り、要するにカーテンのことです。

別院の戸帳は、衣替えと同じ六月と十月に、夏物、冬物が入れ替わります。今は夏物、白地に金の文様で装飾された涼しげなデザインをしています。

戸帳の両脇に下がっている白い紐は、揚巻（あげまき）という、元々戸帳を巻き上げるためのものですが、今では装飾的な意味あいとなっています。

戸帳の上部に懸かっているものは、金華鬘（かなけまん）という装飾です。華鬘とは花飾りのことで、インドで花を糸で繋ぎ、輪を作って尊い方に捧げて敬意を表すことに由来すると言われています。

モダン寺の戸帳の文様は、お釈迦様生誕の地、ネパールはルンビニー村の、アショーカ王柱に刻まれた碑文をデザイン化したものです。アショーカ王柱とは、紀元前三世紀、北インドを統一したマウリヤ朝の王、アショーカ王が仏教に帰依し、インド各地の仏跡を巡礼して、記念として各地に建立した大理石の柱のことです。

ルンビニー村の柱には、古代インドの言語、ブラフミー文字で「神々に愛せられる温容ある王は、即位二十年の後、親しくこの地を巡拝された。ここは、仏陀釈迦牟尼のご生誕の地である故、石で馬像を造り石柱を建立された。ルンビニー村は租税を免税され、生産物の八分の一でよい」と記されているそうです。

西遊記の三蔵法師のモデルとして知られる玄奘三蔵（げんじょうさんぞう）も、この地を訪れアショーカ王柱があったことを「大唐西域記」に記録しています。この石柱と碑文の発見により、ルンビニー村がお釈迦様誕生の地であることが確認されたのです。

お釈迦様の誕生は、ただ単に一人の人間が生まれた、ということではなく、偉大な仏陀となられる方がこの世界にお生まれになられた、ということを意味します。その教え（法）は二千五百年の時を越え、今現在も世界中に響きわたっています。

モダン寺の戸帳を見るとき、お釈迦様がお生まれになられたことの意義と、誕生の地を訪れた多くの仏教徒の願いに想いを馳せてみてはいかがでしょうか？

徒然日記

毎日のお参り中にふと目に付くのが紫陽花（アジサイ）です。一口に紫陽花と言っても、よくよく見ると、手まり型の紫陽花であったり、萼紫陽花（ガクアジサイ）であったり…。色も赤紫であったり、藍色であったりと、それぞれがそれぞれの姿・輝きで咲き誇っています◆様々な色で咲く紫陽花ですが、この色は土が酸性なら青みがかった色に、アルカリ性なら赤みがかった色にと、土の状態によって変わるとのこと…。紫陽花の色は、土の姿を映す鏡。私の姿・輝きもまた紫陽花の如く、時々の環境で変わるのでしょう。◆雨に濡れ艶やかに咲き誇る紫陽花を見るとき、雨傘を差しながらのお参りも悪くない、と思うのです。紫陽花の季節も終わり、これからが夏本番。

帰敬式（おかみそり）受式のご案内

本年、神戸別院報恩講法要にて帰敬式を行いますので、受式を希望される方のお申込をお待ちいたしております。

生かされているよろこびを知り
心ゆたかな道すじをみいだし
ともに仏の門に入るために

◆期日／二〇〇八年（平成二〇年）十一月二十八日（金）◆時間／午後四時三〇分より◆場所／本願寺神戸別院（通称：モダン寺）◆集合時間／午後三時三〇分◆集合場所／神戸別院三階総会所◆申込期限／二ヵ月前の九月二十八日まで。内願を希望される方は、三ヵ月前の八月二十八日までに申請してください。※内願とは、いただく法名の字を前もって本山にお願いし許可をいただくことです（内願懇志一万円以上）◆受式希望の方は別院まで電話、ハガキ等でお尋ね下さい。申し込み用紙をお送りいたします。（電話番号：078-341-5949）◆受式冥加金／成人：10,000円　未成年：5,000円　受式冥加金は当日承ります。

帰敬式って？

「帰敬式」とは、仏祖「（仏）阿弥陀如来、（祖）親鸞聖人を始め浄土真宗のみ教えを私にお伝え下さった方々」の御前で、仏（ほとけさま）・法（仏様とそのみ教え）・僧（仏様のみ教えに生きる人びと）の三宝に帰依（きえ）敬礼（きょうらい）する儀式です。

仏教徒として、更には浄土真宗の門徒としての自覚をあらたにし、これからの人生を力強く生き抜いていくことを誓う、生涯ただ一度の大切な儀式で、「おかみそり」ともいいます。

浄土真宗は俗世間の生活を捨てて出家し、仏門に入るという形は取りません。普段の生活を送る中で阿弥陀さまのお慈悲を我が身に賜ってゆく道です。

従って、実際に髪の毛を剃るということはせず、頭頂部に三度、軽くおかみそりを当てていただくことにより、剃髪をしたこととします。

式は、三帰依文（さんきえもん）を唱えて、執行者よりおかみそりを受け、法名をいただきます。

※三帰依文（南無帰依仏・南無帰依法・南無帰依僧）とは、私たちを導いてくださる仏・法・僧の三宝を心のよりどころとして、敬うことを誓うご文です。

法名って？

『法名』とは、仏教に帰依し、仏弟子となられた方に授けられる、仏法の上での名前のことです。「釋○○」と、釋（しゃく）の文字に続いて二文字で表されます。

最初に「釋」の字が付けられているのは、仏教をお示し下さったお釋迦様の名前から、「釋」の一文字をいただくことにより、お釋迦様の弟子、即ち仏弟子となった者であることを表すためです。

法名と戒名の違い

いずれも仏教徒としての名前を表す言葉ですが、浄土真宗では「法名」、他宗では「戒名」といいます。

戒名は、厳格な規律（戒律）をまもって仏道修行する人々につけられるなまえです。

それに対し、浄土真宗では、戒律の一つも守ることのできないこの私たちを必ず救い、浄土へ迎えるという阿弥陀さまのはたらきを「法」と呼び、その法の中に生かされている私たちがいただいている名前を「法名」といいます。

また、浄土真宗のみ教えは、みな等しくともにお浄土への道を歩ませていただくという教えですから、「釋○○」の法名以外に「信士・信女・居士・大姉」等の修行生活の形態をあらわす位号などは必要ありません。

編集後記

新しい「浄土真宗の教章（私の歩む道）」が発布されました。合わせて今号のモダン寺新聞も、一面を浄土真宗の教章とさせていただきました◆浄土真宗の教章とは、浄土真宗の教えがどういったものであるかを表したものであり、現代を生きる私たちの道標として教示されたものです◆「私の歩む道」とあります様に、私がどう生きるかの指針となり、そして私の宗門のあるべき姿として「阿弥陀如来の智慧と慈悲を伝える教団」と明確に示してあります◆「私」が安心して止（とど）まっていられる場所、「帰する場所」を、仏法に、浄土真宗のみ教えに聞いていくのであります。毎日の朝夕のお勤め時、新しい教章を仰ぎ、私の生きかたと照らし合わせてみてはいかがでしょうか？

（事務局／YS）